

他が終わり、五月八日、無事復員した。

悲惨な生活環境の下でよくぞ生きて帰ったと喜ぶと同時に、死去した戦友を思い出して御冥福をお祈りします。

シベリア抑留記

京都府 畑本 勝

私は、和歌山県粉河町で大正十二（一九二三）年十二月二十四日に生まれ、昭和十四（一九三九）年十月、満州開拓義勇隊に入隊。三カ年の訓練を終え昭和十七年に開拓団に移行。昭和十八年に現地徴集。昭和十九年一月、東安省密山の奥の第十二国境守備隊に入隊。ソ満国境警備に当たる。

昭和二十年、一二六師団司令部勤務（師団長当番）。昭和二十年八月九日、牡丹江掖河にてソ連軍が侵攻。それからの一週間大変な戦闘が続き、その間多くの戦友が次々と戦死された。

終戦の詔勅は横道河子で八月十六日、聞く。

八月十八日、横道河子で武装解除され、五、六日してから牡丹江の飛行場より師団長等と二十六人ぐらいで飛行機でシベリア、ウオロシロフに連行される。約四カ月間将官収容所におり、その後労働大隊に編入され、ハバロフスク第二収容所にて、造船所、コルホーズ、ソホーズ、糧秣倉庫、貨物の石炭降ろし等色々な作業をさせられた。仕事が終わり帰りに少しの坂道でもふらふらで、一気に登れないときもあった。あのこときのことを思えば、よく帰ってこれたものだと思う。

ハバロフスクに約二年、その後「ダモイ」の声で、さあこれで帰れるなど意気込んでナホトカに向かい港に着いたが、何の都合か、港より少し離れた収容所に入れられ、主に港湾工事。私は炊事勤務。収容所の住居は板囲いの上下二段になった宿舍で、特に南京虫が多く、夜も十分眠れないときも多かった。

昭和二十四年九月一日、明優丸に乗船、待ちに待った引き揚げの途につく。

私は和歌山県出身ですので昭和二十四年九月に郷里

に引き揚げて、翌二十五年春に現住所に來ましたが、あまり知人もなく就職も思うようありませんでした。あるとき、やっと近接の市役所に勤められるように決まりかけておりましたが、決定間際になってから、シベリアから帰つた者は思想的に好ましくないとのことで駄目になり、その後色々職を変えているうちに昭和三十年半ばに肺結核になり大手術六回、術後、身体障害者となりましたが、なんとか元気で今現在を過ごさせていただいております。

最後に、あの極寒の地で亡くなられた戦友のご冥福をお祈りします。

泥まみれの軌跡

大阪府 藤本善造

一、ブローグ

昭和二十(一九四五)年十二月の下旬、私の所属した約一五〇〇人の部隊はシベリア中央部に位置するグ

ズバス炭田の一角に設けられた捕虜收容所の門前に到着した。粗末な軍衣を透して零下四〇度の厳寒が肌に食い込んできた。

十月初旬、奉天(瀋陽)を出るとき関東軍の高官は「ソ連軍の命令で諸君に北滿へ行ってもらう、その目的は戦場の跡片づけ、もう一つは収穫期の遅れている農産物の穫り入れに協力することだ。それが終わりに次第奉天へ戻り、日本へ帰ることとなる」と命令した。

しかし北滿へ入ってもそれらしい指示は何一つなく、ハルビンを過ぎ、黒河に着き、凍結した黒竜江を渡ってブラゴエシチュンスタ駅から再び汽車の旅が始まった。私達の周りにいたソ連兵は、口を開けば日本へ帰るのだ、と言いつつ続いていた。私達も蜘蛛の糸にも似た一筋の希望にすがり続けてきた。だが、凍結して白々と光るバイカル湖を過ぎた頃から、捕虜という忌まわしい身に墮とされて、いずこかへ連行されつつあることを絶望のうちに受けとめ始めていた。

收容所は周りを高さ五メートルぐらいの板塀で囲み、その上には幾重にも有刺鉄線が張られ、所々に裸